

入江杏さんから

「私たちが悲嘆とそのかわりについて考えるとき、また、いのちの尊厳について考えるとき、何か力になる本をご推薦下さい」

このような、所長からのぶしつけとも思われる求めに応じ、入江さんから次のメッセージが届きました。

お忙しいなかありがとうございました。

1 「失明地平線」 エムナマエ著 (祥伝社 本体 1,300 円+税)

全盲のアーティストとして知られるエムナマエさんの自伝。挿絵、絵本、テレビCM、子供服のデザインなどで、色彩と夢が溢れるナマエさんのイラストを目にされた方は多いことだろう。若くして売れっ子イラストレータとなったナマエさんだが、38歳の時に糖尿病により中途失明者になってしまう。絶望の淵から、失明後も表現者として生きる道を選択したナマエさん。そのスピリットが詰まった物語がこれだ。

片や私は、2000年末に起きた世田谷事件という思いがけない犯罪の被害で、壁一枚隔てた隣家に住む愛する妹一家四人を喪った。絶望のどん底にいた私が出会った励ましの一冊がこの本だった。万言を費やすより、まずナマエさんの言葉を引きたい。出会いと別れ、そして出来事。全ての過去が自分という人間を作ってくれた。出来事は良くも悪くもなく、それ以上でもそれ以下でもない。貧しさや病気や不運も敵ではない。むしろ、それらを敵にしてしまう自分こそが本当の敵かもしれないのだ。全ての出会いや出来事を自分の味方にしてしまえば、人生に失敗などあり得ない。これこそが真実の楽観主義である。未来に不安を抱いても、何も生まれやしない。未来は今の自分が選び、作るものなのだから」(本書あとがきより)

帯には「世界で一番幸福な物語」幸福とは心の状態に他ならないことを思い知らされる。立川談志師匠ならずとも「ウ〜ン、何と云っていいか、家元(オレ)なら完全に人生を投げたぞ…」すごい人がいたもんだ、と思わず唸ってしまうだろう。ぜひ、ご一読を。

2 「あしたのねこ」エムナマエ絵 きむら ゆういち文 (金の星社 本体 1,300 円+税)

事件後ずっと罪責感に苛まれた。なぜ妹たちを助けることができなかつたのか？あれほど心も寄り添っているつもりでいたのに・・・どうして、どうして、気付いてあげられなかつたか？と自分を責めるあま

り、絶望の虜になってしまったこともある。明るく健やかだった妹、無垢な魂の持主だった一家4人が命を奪われてしまう、しかもあれほど無残に。理由など皆目見当がつかない、あまりにも犯罪とは無縁の4人だったから。なぜ、こんなバカなことが！理不尽さのあまりに、怒りと悔しさの虜になってしまったこともある。行きつ戻りつする悲しみの中で、出遭ったこの絵本が勇気をくれた。

「あらしの夜に」で知られる人気作家のきむらゆういちさんがお話を、前段のエムナマエさんが挿絵を、お二人のコラボレーション作品だ。主人公はきょうだいと一緒に捨て猫になってしまった子猫。やせっぽちだし、毛はぼさぼさだし、がまがえるみたいな声。一人ぼっちになった子猫にふりかかる数々の苦難。でもどんな逆境でも、何か一つ「いいところ」を見つけて、明日に向かって歩いていく。「ほらね、やっぱりいいこと見つかった」とつぶやきながら。

「人生は生命、寿命、使命という3つのいのちでできている、そこに運命という人間にはどうにもならない出来事が予想もつかない形でやってくる、笑って過ごすのも泣いて過ごすのも自分の人生だ」というナマエさんはまさに「あしたのねこ」だ。

私も「あしたのねこ」になりたい！事件の辛さ、悲しさに、しょんぼりうつむいたまま、生きていくのは嫌だ。惨めさに自分を閉じ込めたくない。そう思った。優しい人にもらわれて・・・なんて、予定調和を迎えない結末はちょっぴりほろ苦い。でも、にっこり笑って「にゃあ」となく子猫。現実を真正面から受け止めて人生を切り拓こうとする時って本当にこんな感じだ、また前に歩いていける、そんな手ごたえだった。

3 「ながいよるのおつきさま」シンシア・ライラント作 マーク・シーゲル絵（講談社 本体 1,600 円+税）

「アライグマのお月様」(Coon Moon) アメリカの先住民族は9月の満月をこう呼んだと言う。森に潜むアライグマの黒い瞳を満月に見立てたものだろうか？よくわからないけれど、夜気に包まれた深い森を煌々と照らす満月に思いを馳せてみる。

照らすに満ちては欠ける姿に、眉月、望月、いざよい月など、日本でもいろいろ呼ばれる月だけれど、ネイティブアメリカンが満月につけた十二の美しい異称に詩想を得たのがこの絵本だ。「さし絵描きの冒険」と題する巻末の画家のコメントによれば、木炭を使うことで、ようやくそのやわらかな光の表情を描き得たという。神秘的で、幻想的で息を詰めて見とれてしまう満月たち。

太陽みたいに身も心も健やかだった妹が、まさかあんな風に逝ってしまうなんて。闇に怯えて眠れない夜が続いた。

犯罪被害で愛する人たちをなくすまで、夜を怖いと思ったこともなかった。生まれ育ったところは東京の街中。家も店もひしめき、立て込んだ商業地だった。夜遅く帰っても、人通りが多くて怖くなかった。結婚してからイギリスの田舎に長く住むことになった。エーカーという聞きなれない単位で数えられるほど広い庭があった。東京と比べると、お店も人も少なくって、最初は本当にさびしかった。でも、慣れてくると、自然の懐に抱かれている安心感が湧いてきた。野兎たちが庭を跳ねまわっていた月夜。月光

浴、そんな言葉を思い出すほど、月が明るい夜だった。月の明るさが際立つほど、闇が深かったのだろう。東京の光に満ちた夜も大好きだけれど、夜の香気に包まれて輝くお月様と、親密な会話をかわしたことが今も忘れられない。

事件後、悪意の痕跡を辿る作業が続いた。服やバッグなどの遺留品、靴跡、指紋、血液型、DNA。いくつも手掛かりは残されていたにもかかわらず、犯人は全く皆目見当もつかない。ましてや動機など！誰に恨まれることもない4人だった。にもかかわらず、必死で誰がやったかを考える。もう泥沼にはまったようだった。あの時出会ったあの人が、あの時のあの事が原因で……なんでもないことばかりだ。ちょっと肩が触れた、とか、ちょっと水をこぼした、とか。そんな些細なことが、無辜のひと4人を葬り去る動機になるはずもない。ただそれほどに思い当たることがないのだ。必死で悪意の痕跡を辿る作業に、身も心も憔悴した。夜が怖い！第一発見者となった母は、特に夜に闇に怯えた。

私と夫がイギリスからずっと続けている習慣を取り戻したのは事件からだいぶ経ってからのことだ。その習慣とは散歩。夫は太陽の光が好きで、朝の散歩が一番というだけけれど、私は夜の散歩も好きだ。月(ルナ)の光に打たれると、ルナティックになる、気が狂う、と言うけれど、そんなはずはない。時に蒼く、時に真珠色のその光を、心ゆくまで浴びれば、きっと平らかな心を取り戻せる。この絵本の月を見てほしい。どの月も静けさの中に命の力強さ、豊かさを秘めている。それは朝の光に勝るとも劣らない健やかな力だ。タイトルのロング・ナイト・ムーン(長い夜のお月さま)は、朝が来るのを信じて待ち続ける師走の誠実な満月のこと。明けない夜はない、と信じて、事件解決を祈る。

4「わすれられないおくりもの」スーザン・バーレイ作 (評論社 本体 1,000 円+税)

みずみずしい絵と穏やかな文章が死を受け入れるきっかけを静かに深く示してくれるこの絵本はまさにグリーンケアの一冊だ。最終ページを開く。友人のアナグマの死に思いをはせてたたくモグラの小さな姿。モグラが見つめる先にあるのは水色の空だ。薔薇色の雲が流れている空。風の揺らぎを、草のおいを感じる。ペン画に淡い水彩で着色された絵が確かに伝えてくれる空気感。

ああ、こんな雲を見たことがある、と感じた。頭上に広がる空にあんな薄桃色の雲を見たのはいつの日だったか？ 妹一家が事件で亡くなった翌年は、桜が咲いたことさえ気づけなかった。悲しみに暮れて日々を送り、気がつくと、花も散った若葉の季節だった。姪の誕生日の墓参。初夏の風が颯々と吹き渡り、草がそよいでいた。

「アナグマの残してくれたものの豊かさで、みんなの悲しみも消えていました」訳文の「豊かさ」という言い回しは、原文にはない。As the last snow melted, so did the animals' sadness. 最後の雪が消えた時、みんなの悲しみも消えていた、とただ淡々と事実が語られている原文に比して、邦訳には、遺されたものたちのアナグマへの感謝が一層深く表現されているようだ。

妹たち4人は人生の半ばで、思いもかけない事件によって命を落とした。けれど、その一生は全きものだった、と私は思いたい。「豊かさ」という表現は、穏やかな死を迎えた者にだけ、許されたものだろうか？どんな亡くなりようでも、人の一生は豊かで全きものだ。墓参の日、薄桃色の雲がたなびく広い空を見ながら私は思った。死んだら終わりなんかじゃない。その人の残した知恵や工夫を共有することで、ずっとつながってる。それこそが忘れられない贈り物なのだから。

5 「スーホの白い馬」 大塚 勇三再話 赤羽 末吉絵 (福音館書店 本体 1300 円+税)

一枚の絵がある。白い子馬を抱き上げている少年羊飼、背景には緑の野原と点在する羊たち。羊飼いの少年スーホが、山中で傷ついた白い子馬を助けたシーンを描いたこの絵は、世田谷事件で亡くなった姪のいなが最後に残したものだ。

題材となった物語は、モンゴルの伝統楽器「馬頭琴」の由来にまつわる民話だ。赤羽末吉画伯のスケールの大きな絵とともに展開されるこの絵本。スーホが手塩にかけた白馬はやがて非業の死を遂げる。亡き白馬に夢で告げられ、その骨や皮で楽器を作るスーホ。愛馬の遺志を形にした馬頭琴は、妙なる調べを奏で、人々の心を慰めたという。

なぜ姪はこんなにも美しく悲しいお話を選んで、最後に絵として残したのだろうか？私も、スーホのように遺志を聴き取り、社会に繋げていけたら。このお話が選ばれたのは偶然の符合ではなく、私に与えられた道しるべではないか。そう思えた時が私の再生への第一歩だったのかもしれない。振り返って今、そう思う。

6 「悼む人」 天童荒太著 (文藝春秋 税込み 1,700 円)

毎年末に「ミシュカの森」と題する妹一家を悼む追悼の集いを開いている。「ミシュカ」とは妹一家がかわいがっていた小さなくまのぬいぐるみだ。妹たちの七回忌の年に、「ずっとつながってるよ こぐまのミシュカのおはなし」入江 杏 絵と文(くもん出版 1,000 円+税)という絵本を出版した。生き生きと生きていた四人の人生を思い、たくさんの思い出、エピソードを一冊の絵本に込めた。その絵本にちなみ、追悼の会を「ミシュカの森」と命名して下さったのは、悲嘆学研究所の鈴木康明先生だ。

「ミシュカの森」の集いは、事件後 8 年を経た昨年ようやく世田谷の地で開くことがかなった。今でも事件現場には行かれない私だけけれど、世田谷の地で妹一家に思いを寄せ、捜査協力をして下さった方々への感謝をどうしても伝えたい！だからこそ、世田谷開催にこだわった。メインゲストとして、柳田邦男先生が講演して下さいました。タイトルは「悼む心 つながるいのち」。「悼」という文字は、激しく心が動く様を意味すると言う。激しく心が動くほどの思いがあつてこそ、命がつながってゆく、というタイトルを、前掲の私の絵本「ずっとつながってるよ」にかけて、柳田先生がつけて下さった。ありがたく嬉しく思い、多くの友人に講演会の案内を送った。

すると、何人かの知人から「悼む人」を読みましたか？という返事が返ってきた。

新刊当初から船越桂さん装丁の表紙の佇まいを目にし、書評なども気になっていながら、すぐには読めなかったあの本。追悼会が迫った年末に読むと、それこそ心が激しく動いてしまうようで・・・年明けに読んだ。プロローグを読むなり、涙が溢れた。一気に読み、涙に浄化された清涼感に浸った。

同時期に息子も読んだ。思春期に愛する叔母夫婦ときょうだい同然に育つたところを失った。彼は言った。「これって僕の物語だよ」

「悼む人」となって、全国放浪の旅を続ける主人公の姿が、母親、週刊誌の記者、殺人の刑期を終えて出所した女性、三人の視点から描かれる。主人公が悼みの旅で問い続ける言葉は、「誰を愛し、誰に愛され、どんなことで人から感謝されたか」

そんな悼み様を、私はずっと求めていたのではないかな？ 事件での亡くなり様、その禍々しさだけで、妹たちが記憶されるのは、あまりにかわいそうだ！ ずっとそう感じてきた。傍らにいた私には、生き生きと生きていた妹たちの記憶が刻まれている。洪水のように流される報道、そこに描かれるステレオタイプの被害者像に憤りさえ感じた。その違和感こそ、私が発信し始めた動機かもしれない。犯罪被害者遺族は悲しみに沈んでいるもの、顔を伏せ、沈黙すべきだ、との無言の圧力。犯罪による死者に纏わるものというスティグマ。「恥の意識」にただただ抗いたかった。

無秩序に点在する無数の星の中から、いくつかの星々が結ばれて、輝く星座が象られ、語り継がれてきた星座の物語。人生の一つ一つのエピソードを心をこめて語ることによって、その人の一生を物語っていききたい、星座の物語のように。誰も語らず、誰も書かないなら私が語り、書こう、と思った。

「私の人生をたくさんの星が輝いている空にたとえるなら、なかでもキラキラ輝いていた大きな星々が四つ、突然消えてしまったのだ。ずっと煌めいていると信じていた星。その星が消えた冥い空。あんなにきれいだった星座の形はゆがんでしまった。以前とは変わり果ててしまった星空を見上げて、思う。喪われた四人の物語を、もう一度語り直すことで、新たな星座を私の人生の星空に描き出したい。姿を変えて生まれ変わったその星座が、再び煌めきを放つように。」

[7 「この悲しみの意味を知ることができるなら」より抜粋 入江 杏著（春秋社 本体1,600円＋税）](#)

時に私たちは、死者をないがしろにしたり、まつりあげたりしなかったか？ 徒らにその死を嘆き悲しんでは、亡くなり様やその因果ばかりを語ってはこなかったか？ 「悼む」とはそんなことではない。その人がどんな風に生きてきたか、その人の存在を胸に刻むことなのだ。誰を愛し、誰に愛され、どのように感謝し、感謝されてきたか・・・ 悼めば悼むほどに、思いを馳せれば馳せるほどに、今でも、心が激しく動く。これからもずっとそれは変わらないだろう。その悼む思いを伝えることが、私のできること、私の使命だと感じている。